

(表紙イメージ)

久保孝雄詩歌集

詩歌日記で綴る人生の四季

青春・朱夏

白秋・玄冬

目次

まえがき

I	はるかなる青春 (はる)	Page
II	朱夏から白秋へ	Page
III	白秋から玄冬へ	Page

まえがき

一九七五年四月、横浜国立大学教授から神奈川県知事に初当選した長洲一二さんに請われ、四十四歳で県庁に入った私は、四期十六年間政策スタッフ（アメリカ風に言えば特別補佐官、八七年から九一年までは副知事）を務めた。九一年六月には、知事の命により長洲県政の最重要プロジェクトの一つである「かながわサイエンスパーク（略称KSP）」を軌道に乗せるため、県を退職し、運営会社として設立された第三セクターの（株）ケイエスピー（資本金四五億、うち十五億が県、川崎、開銀、民間企業が三〇億）の社長に就任した。

県庁退職にあたり、送別会を開いたり、日本初のサイエンスパーク立ち上げに向かう私を励ます壮行会を催してくれたりした先輩、同僚、友人、知人たちに、記念品としてお配りするため、青春時代の詩歌日記をまとめて私家版を作ったのが詩歌集「はるかなる青春（はる）」である。

そして、この度、卒寿を迎えるに当たって、四〇代後半から中高年時代の詩歌日記を整理したものを「朱夏から白秋へ」「白秋から玄冬へ」と題してその続編とし、一冊に収録した。したがって、「久保孝雄詩歌集・詩歌日記で綴る人生の四季」は、「I・はるかなる青春（はる）」、「II・朱夏から白秋へ」「III・白秋から玄冬へ」の三部構成となった。これは文学作品というより、詩歌の形を借りて昭和初期から90年生きてきた人間の生活・活動の足跡を綴ったものである。

研究者から公務員へ、公務員から経営者へ、さらに社会活動団体役員へと駆け抜けてきた人生を振り返ると感慨ひとしおのものがある。「人のこの世にあるは、父母を因とし、無明（むみょう）を縁とす」という仏教語があるが、改めて父母に感謝し、奥深き無明の縁（えにし）に深く頭（こうべ）を垂れる。

二〇一九年六月七日 九〇歳の誕生日を記念して

久保孝雄

I・はるかなる青春（はる）

ご挨拶（私家版配布のご挨拶）

皆さん、長い間お世話になりました。心から厚くお礼申し上げます。

このたび、遅ればせの還暦と神奈川県庁退職記念を兼ねて、若い頃書き留めておりました詩歌の一部をまとめ、ささやかな本にいたしました。若き日の拙い記録を通して、遠く去った戦後初期の時代の、貧しく、苦しく、しかしどこか奇妙に明るく健康だった日々のことを偲んでいただければ幸いに存じます。

一九九一年八月

久保孝雄

目次

I 短歌集

敗戦	一九四五年～四六年
出郷・苦学	一九四六年～五〇年
青春	一九五〇年～五八年
北海道・炭坑労働調査	一九五四年
選挙	一九六四年二月
ソビエト行	一九六七年四～五月
告別	一九七二年一～二月
中西 功さんの死に	一九七三年八月
追録	

II 詩集

山里にて	
失恋	
数奇屋橋にて	
アメリカ中古	
神経衰弱	
子供たち・一	
子供たち・二	
お陀仏	
芝生の娘たち	
ある寝物語り	
目白駅にて	
外出	
○ちゃんの「革命」	
おくれた人	
そば屋の娘	
三鷹の街で	
音のない言葉	
下田と志村	
俺と太陽	
ふみちゃん	
子供たち・三	
野の花	
遠足	

出勤の朝
二七歳の年の暮れ
老婆と「社会主義」
かなしみ
モスクワに告ぐ
私の土地
クリスマス・イヴ

Ⅲ <メモ帳より> 貧しき時代の貧しき人々のこと

ある会話
おみくじ
夫婦げんか
少女の死
三鷹・新川の居酒屋にて
銭湯にて
ラジオ修理
焼芋屋の少女
古い友人と出会う
慈善
空の色

〈付録1〉筑波山の雄姿を心の糧に

〈付録2〉これからとも友情ある交流を

あとがき

久保孝雄
久保美子

書評1 石川真澄 浮かばれぬ死霊の群れをモスクワは想像できるか
書評2 鈴木正実 真髓は青春時代の魂の叫びにある

I 短歌集

敗戦・・・・・・・・・・一九四五年〜四六年

敗戦に先ずは笑みたるわが姉を 憎みて見れば子に頼ずりてあり

(八月十五日、近所の人数人が集まり、わが家で玉音放送を聞く)

(長姉は横浜・本牧で空襲で焼け出され、幼女を連れて疎開していた)

戦場に二児を送りしわが父は 玉音に佇ちつくす青桐のもと

(その夜、庭に出て慟哭する父を見た)

滅びたる国原てらす月冴えて 北支に戦死せる兄やさしかりき

(次兄は戦車兵となり、戦闘中地雷を踏んで爆死したという)

森に入り敗戦に哭くわれ尋(と)めきたり 諭したまえる英語の教師

(S先生は灯火管制下、「敵性語」の英語を個人教授してくれた)

銃執りし校庭(にわ)に繁れる桜木は 黒くしずみて敗戦に喪す

(軍事教練に明け暮れた校庭をさまよう)

冴えざえの星に桜木葉ずれしは 見果てし夢の嗚咽なるかや

西陽さす学校工場静まりて「尽忠報国」の四字虚脱して読む

敗戦を知らざる児らは城祉に 突撃ごっこをなおくり返しおり

復員(かえ)り行く一等兵が眼(まなこ)あげて 銃を片手に足取り堅きは何故ぞ

仏印に消息断ちしわが兄は　ビルマに征きしと戦友の告げたり

(行方不明だった長兄のこと、「仏印」は今のベトナムのこと)

いくさ熄み陸士の友が丸腰で　会いにきたるをかなしむべきや

(「陸士」は陸軍士官学校、職業軍人の養成校のこと)

胸を病み衰えて帰還(かえ)りしかの爺は　馬もおのれも徴用されし人

「満州にて父処刑」の報に号泣慟哭する　友を抱きて沼に遊べり

(親友Zの父は満州国高官だった)

沼の辺の葦原に佇つわが友の　この背の寂寞をいかにせんとす

焼け跡の横浜に還りゆくわが姉は　共産主義を研究せよと言ひ残したり

復員(かえ)りきし兄をば見ればさらばいて　なお軍隊調の残るかなしき

(「行方不明」の長兄は3年後ビルマ戦線から「骨と皮」で復員した)

復員りきて闇屋して生きる兄助けんと　二十里の道自転車を踏む

陸幼に陸士に行けと吾を責めし　かの配属将校いま釣糸垂るる

(「陸幼」は陸軍幼年学校、旧制中学、2年で受験できた)

洋モクをくゆらす敗け肥りめは昨日まで　国策会社の指導員なりき

ほの暗き電灯のもと感動す　洞窟に息吹く赤き中国

(上野の闇市を歩きし折、偶然にもエドガー・スノー著『中国の赤い星』を買う)

『中国の赤い星』読みて夜明くれば　われの心は「中国」に定まる

(兄たちは中国と戦ったが、弟の私は中国と仲良くする仕事をしたいと決心)

出郷・苦学……一九四六年〜五〇年

わが家の貧しきいわれをわれは知らず はげしく生きん生きてみるべし

東京の外語学校の合格証 父に示せど答え給わず

(担任の英語教師は法学部進学を勧めたが、東京外語中国語学科のみを受験、合格)

わが父の木箱より大銭ぬき去りて 夜も白々の駅へと走る

朝ぼらけなつかしの筑波遠去りて 苦学の途にわれいま就かん

鈴なりの常磐列車に乗りこめば まなかいの乙女苦しみてあり

学び舎は仮住まいなり井草なる 麦畑のなか小学校のごとし

(空襲で焼失した東京外語は練馬区上井草の仮校舎で授業した)

これがこれ語学教育なるか『急就篇』食らうがごとく暗誦させたり

(『急就篇』は中国語入門テキスト)

雨降れば外人教師と四人なり 第二外語のロシア語の午後

(ロシア人教師は捲舌音指導のため、わが口中に指を入れようとした)

日本語を禁じ合いたるかの友と われはしだいに遠ざかりおり

(在学中、中野区上高田の日新学寮で生活した)

食堂に半刻も並びてありつけし 芋雑炊のいと軽き碗

米藪を背負いきてわずかに届くれば 苦しく笑みてありわが老教授

(寮の舎監だったポルトガル語の田先生は無理して入寮させてくれた)

マントかむり酷寒に並びて手に入れし この書(ふみ)いたく尊かりけり

学寮の二十畳間に友ら坐して 床板はぎて暖を採りおり

学寮に復員学徒らたむろして われらを使役せり心地よきげに

(軍服を着た復員学徒らが幅を利かせていた)

わずかなるキセルをせるにわが頬を 二度打ちし駅員は復員兵なりき

かくしげく語学学ぶは何の謂(いい)ぞ 半歳にしてはや望み失せたり

(引揚者、旧軍人たちが飛行場跡地を開拓した「筑波自由農場」に友人を訪ね、そのまま入植)

学に倦み筑波嶺(ね)の麓(もとえ)のこの大地 入植せしは敗北なるか

食糧(もの) つくる質実の暮らしにあくがれて 入植せしもここも人の世

飛行場の跡に播きたる麦枯れて 野兔捕りて食わんとすわれら

三人の子らを残してみまかりし 入植者の亡き骸荷車にひく

農場の果てなる闇にあかあかと 葬(はふ)り火たちて子らは哭き伏す

闇に立つ友らの姿あかあかと 入植者の葬り火小夜嵐吹く

旧軍派と引揚派のいさかいしめり帯び われ農場の暮らしに倦めり

(台北帝大農学部出の人が強く復学を勧めた。八カ月ぶりに復学し、学寮に戻る)

学び舎に戻りてみれば共産党の プロパガンダの意外にはげし

いづくよりか『人民日報』持ちきたり われに読ませしかの中退の友

鳥打帽ふかくかむりて革命の とき来たれりと説くかの中退の友

党に入りし友らがなべて確信に 満つるさまみてわが心憂し

決意して入党申込書に筆執れば ハラショーと叫ぶロシア語の友

（「ハラショー」は「いいぞ！」の意味）

駅頭にアカハタ売れば初客は 赤子背負いし朝鮮人なりき（東中野駅にて）

米兵の車洗いし一週間 屈辱に耐えたり学資乏しければ（原宿にて）

音楽もせりふもすべて覚えたり フィルム運び三日をやれば（金杉橋附近の映画館にて）

思想問う鉄工所の主に黙しつつ 家庭教師を辞して帰れり（赤羽駅附近）

登校の途中にレンゲ咲くをみて 花に臥したり故郷恋いつつ

内鍵とカーテン閉めし査問官 初体験にわれはおののく

（党批判文書を配り反党分子として査問を受ける。拷問はなかったが、党にふかく失望）

青春・・・・・・・・一九五〇年〜五八年

(アルバイトで入り、のち就職してお茶の水の(社)中国研究所に通う)

温顔にてわれを雇える事務局長は 豊多摩刑務所の思想犯なりし人

(東亜同文書院出のゆさんは企画院事件で投獄されていた)

数日の鞆持ちせるにわが所長 自著にサインして吾に給うなり

(東大教授・平野義太郎氏、戴いた本は「日本資本主義の機構」)

定期的に『人民日報』など届けきて そそくさと去る丈高き人

(国交なき中国資料はアングラで入ってきた)

毛沢東・劉少奇らの論文の 下訳命じられ雀躍(小躍り)するわれ

天安門に毛沢東の声甲高く「中華人民共和国今天成立了」

(ジョンホワレンミンゴンホクオ ジンテイエンチョンリーラ)

群を技く舌鋒するどき理論家は ズルゲ事件の死刑囚なりき

(中西功さん、後に共産党参議院議員と初めて出会う)

宴にてロシア民謡所望せるは 死線越えきし政治犯なりき

毛沢東は無謬なり否さにあらず 激論の果てしたたかに酔う

ひよろひよると青白くやせたる子供みて わが子のように思えるときあり

(三鷹駅前通りにて)

ぼつねんと日盛りに佇(た)つ亀甲飴屋 父と似たるところあり胸しめらるる

もの悲し夏の夜明けはすではや 裏の林に蝸(ひぐらし)なけり

(三鷹下連雀にあった旧中島飛行機の古びた寮に住む)

食うものも喫うものもなしわが部屋を シャツ乾くまで出るも出られず

いろいろの虫が出てきて気味わるし わが借り部屋の夏の夕べは

人間の価値をきめるは金にあらじと つねに思えどつねに思えど

寂しさにまけるなというその君の 瞳のしばしうるむをみたり

朝日さす湯わかし場にて君を見染む 朝日さす頬げに美しければ

(中国研究所はお茶の水の政経ビル5階にあった)

長髪を刈れ背広で勤めよといいしわが理事を 宴の席で首締めにつけり

(イスラム研究の大家だったこの理事も今や亡し、合掌)

古びたる葉書ここにありわが友の 命亡せるよりやや古き日付けで

(親友Zは幼児を救わんと線路に入り、事故死した)

今夜もしわれ急死せばそのあとは 考え馳せて夜は白みたり

月明にシューベルト歌う土工あり 齒ぎしりしおるか汝が才能は

さらりいの遅配欠配重なりて われに何をば食(は)めしというか

(労働調査協議会に移って 給料はがた落ちした)

わが父の食の貧しさ夢に見て 明くる日早く送金したり

「父わるし、早く帰れ」という弟の 葉書を抱きて麦畑を走る

まなかいの友血を噴けり頭蓋より 身捨てんとす血のメーデーは

(この友とは、「革命近し」と説いたかの鳥打帽かむりし中退の友)

暗き酒場メーデー歌もつれる労務者の その膝元に眠るみどり児

漆夜にひかりうごめく仄見えて 不吉の報らせ運べる灯かも

幼き日みた夢一ついまも忘れず 土堤にしゃがみて泣ける亡き母

冬近き晩秋の夕べは母想う 病い冒して働き死にしわが母

(母の命日は一〇月二〇日、私が10歳の時、底冷えのする日の夕方、稲刈りから帰った母は「お

お寒」と言っただけ崩れるように庭にたおれ、私が呼んできた父に抱き上げられたまま逝った)

朽ち果てし母の墓標に涙せば 本枯らし立ちてわが不孝責む

北鮮が日本を追い越すという話 屈みてしきりにしゃべりおる二人(北千住駅にて)

あと幾年かの老夫婦らは生きるらん 社会主義日本に生きたしというも

(老夫婦の夫は高級官僚OBだったが、帝大出の一人息子が左翼だった)

雨に濡れ肩をすぼめて行くわれの いまの心をレーニンよ知るや

風邪に臥すわれをあわれみお内儀らは とりどりの菜吾に給うなり

(古びた寮に住む人たちはみんな親切だった)

高熱にたおれしわれをいつくしみ いつくしみ給えりかのお内儀らは

大雪のふぶく夕べを素足にて 銭湯に走るわが頬に涙

(銭湯には畑や森や小川をこえて二十分かかった)

凍りたる朝焼けの野面われ行けば 命に透りくるバツハの調べ

テレビみてラーメン食って帰りたり しきりにうつろなる休日の午後

庭に咲くバラの木愛でて花愛でて われめずらしく心和めり

薄紙を差し出して三日泊り行きし かのポリシェヴィーキがスパイなりしと

(彼は旋盤工上がりの党専従活動家だったが、なぜか除名処分を受けた)

時雨るる日離婚話に男泣きして油浴び マツチ構えしかのニコヨンは

(日当二四〇円の失業対策事業の労働者)

さ霧立つ麦畑行けば荒縄を 巻きたる狂女彷徨いてあり

(隣室の住人、午後はいつも着物姿で野良道をうつろに歩いていた)

麦秋の到れるたびに湧きつゝのる このかなしみの由来はなにぞ

母想う涙たたえしわが頬を ついに濡らせし蓮田吹く風

らんまんの花の都を歩めども 母亡き春の花ぞかなしき

われ想うひとはわれを想わざり われ想わざるひとわれを想うなり

青嵐吹けよ吹け吹け天地に わがかなしみを吹きて散らせや

栗の花はかなしきかなや静まりて 匂い咲けども賞でる人なし

再びは訪うこともなき山寺の 雨に打たるる山吹の花

鉢植えの夕顔を抱えしかの君は 今宵かぎりの見おさめなれば

東京のビルより見ゆる筑波嶺は やせて小さくあわれにぞ見ゆ

親不知はじめて会いし日本海 黒き海原暗き雨降る

はるかなる西多摩の嶺に茜さす この夕映えを誰に捧げん

西多摩の嶺に茜さすこの夕べ われ佇ちおれば突き刺さりくる孤独

静まれる林のなかに一人坐し 汝が名を十ぺん怒鳴りてみたり

利根川の枯葦原に疾風(はやて)吹き 満天の星「生きよ」と如くに

病癒え訪ねし友の妻手作りし 味噌汁の香りしみじみかなし

荒れ狂う冬の嵐よ心あらば 父の陋屋さけて吹かまし

荒波も岩に砕けて散りゆくを なおつのりゆくおもいはかなし

埃立つ筑波街道われ行けば 思い出の森思い出の原

(久しぶりに帰郷して)

麦畑に竜巻のぼり雀らは よろけよろけて北に向かいぬ

雨やんで虹のかかれる夏田には 水みなぎりて人生や佳し

唾(おっち) ゆえ人の手伝いして生きる 見知らぬお婆(ばば)と稲を刈りにき

「名物は薩摩芋に空つ風だんべ」と 煙管くわえて答えし農夫を愛す

本枯らしの吹き絶えてあり東(ひんがし)の 白壁土蔵三日月冴えて

本枯らしに吹き凍りたる野の道を 頬かむりの農夫よろびて行けり

盲いたる目に涙してわれを拝む 老婆のために談判に走れり

(老婆の夫はコンニャク屋の釜炊きで、大火傷して入院していた)

城跡にのぼりてみれば幼き日の　ざわめき遠く湧き立ち聞こゆ

月冴えて夜の更けわたる草原を　露踏みゆけば果てしなき夢

冬近き野分き行く夜のススキ原　きみと歩めば魂きわるわれ

われもまた老いたる先は野に出でて　土を相手に生きんと思ふ

湖（うみ）　べりの朝霧ふかき森なかに　死にてゆきたしモーツァルト聞きつつ

北海道・炭坑労働調査に行く……一九五四年

合席の若さ女が居眠りて もたれきたるを支え行くわれ（函館本線にて）

炭坑の町に入ればさすがなり 役場よりでつかき組合本部

炭住の裸電気のわびしきは わが故郷のわびしさに似る（炭住とは炭鉱労働者の住む長屋）

炭住の小学校の運動会 しばし見つるにうるみ来る暇

ひたすらに線路の道を歩みたり 路銀乏しきオルグのわれら

霧のごと花の粉降る原始林 むせかえり行き尋（と）めしわが道

路銀絶え線路歩きて夜明くれば 極楽のごと見ゆ菜の花畑

限りなき菜の花の道に夜明くれば 浄土の朝もかくと偲ばゆ

果てしなき菜の花の道むせかえり むせかえり行く北国の春

美わしき蓮のうてなに糸紡ぐ 母を夢見て旅寝覚めゆく

函館にて荷物持ち助けしかの婦人 浅虫に泊まれとわれを誘えり

誘われて降りし浅虫夕焼けて われ駈け技けて汽車に戻りぬ

選挙・・・・・・・・一九六四年二月

半歳の固辞も空しく立候補 決意せし夜の流星一つ

(茨城県取手町議から町長選に出て惜敗した高橋英典氏に口説かれて)

高橋さんは東大経友会から全学連初代書記長。後に朝日航洋社長)

立候補決意せし夜にわが妻は 貯金通帳差しいだしけり

北風も西風も衝きペダル踏む 利根のほとりで候補者となるわれ

わが妻はなれぬ身ぶりで教員の 仲間訪いつつ吾のために請う

たすきがけみぞれの街をわれ行けば 握手求めくる勤め人らは

声もかれ足も棒なる一週間 革新初議席へ変わり果てしわれ

(立候補33人、定数30人中161票を得て8位で当選)

当選の夜のストーブあかあかと 革新初議席に労組員ら酔う

選挙終え利根の河原に降り立てば さびしきかなや天翔ける鳥

ソビエト行・・・・・・・・一九六七年四月～五月

全ソ青年団体協議会の招きで「青年ジャーナリスト代表团」の団長として、
ヶ月間ソ連各地（ナホトカ、ハバロフスク、モスクワ、キエフ、バクー、レニ
ングラード）を旅した。アレンジしてくれたのは社会党機関紙局の加藤宣幸さ
ん。

棧橋に議長・助役ら幟振りて われの訪ソを祝してあるも（横浜港大棧橋から船出す）
棧橋のどよめきのなか妻子ら遠去りて 初外国（とづくに）の旅われはいま発つ

（この航路で有名なのはバイカル号だったが、僕らはトルクメニア号だった）

船員の半数近くは女なり「トルクメニア」はソビエトの船

船室を拭きておりたるたくましき スラブの女はげしく吐けり

これがこれ社会主義なるかナホトカに 一步印せし街のわびしさ

アムールの結氷解けて渦巻ける はるか彼方に中国の岸見ゆ（ハバロフスクにて）

墓守の老婆着ぶくれてつつましく 日本人墓地の隅に座しおり

（シベリア抑留で亡くなった日本兵の墓はロシア人が丁寧に管理していた）

わきつのるわが想いこめイリュージョン モスクワ向けてハバロフスクいま翔つ

白皚々（がいがい）のシベリア大地翔びゆけば この広漠の地になお人の住めるか

霧ふかきドモジエドヴォ空港に降り立ちて モスクワの冷氣息ふかく吸う

縦の木と白きリンゴの花の下 わが愛せるマヤコフスキーは眠る

(マヤコフスキーは革命詩人、後に革命に失望してピストル自殺)

ロシア人とスターリンについて激論せしは モスクワ大学の花咲ける広場

レーニン廟に数千の民列なして「赤の広場」に陽はふりそそぐ

花に埋もれ眼を閉じてありレーニンは 生けるがごとくもの想うがごとく

レーニンは労多きかな死してなお 民衆の教化にいまも働くか

クレムリンに二十一発の祝砲とどろきて 革命五十年のメーデーいまぞ始まる

ごうごうと戦略ミサイル砂塵蹴って 赤の広場にどよめきあがる

はなやげる市民パレードさわやけく ミサイルにまさりてわが心うつ

ドル無きやとわれに問いたるかの少年 利発なる眼にかなしみの影あり

緑濃きモスクワ裏通りそぞろゆけば 超ミニの美女腰ふりてゆく

キエフ行きの汽車で会いたる浅黒き アルジェリアの闘士指もげてあり

みはるかす緑のキエフ春たけて ドニエプルの岸边シェフチェンコ想う

(シェフチェンコはウクライナの国民詩人)

美わしきソフィア寺院を案内せし ミセス・ターニヤの青く澄める瞳

ロシア式の男同士の抱擁に いたく感動すキエフ駅頭

キエフなる共産青年同盟(コムソモル)議長は美女なりき 栗色の髪西陽に燃えて

風の街バクーの夜に降り立てば 水着の乙女らスマイレ持ちて迎う

(海岸の保養所に泊っていたウリヤノフスクの女工さんたちだった)

バクーなる歴史博物館の事務員の 白きセーターは日本製なりき

カスピ海のかなたはペルシャなりこの夕べ バクーの街でアラブの歌聞く

炎熱のバクーより翔べばレニングラードは氷雨 この大いなる国大いなる季節

(五月なのにバクーは38度、レニングラードは3度だった)

氷雨ふるネフスキー通りにわれ佇ちて ロシアの生きし一世紀を想う

蜂起せるかのオーロラの英雄も いままるやかに昔を語る(巡洋艦オーロラ号にて)

名にしおうエルミタージュに入り来れば 圧倒してくるこの美のエネルギー

冬宮の庭を歩めば民衆の 蜂起せる日も遠く偲ばゆ

ヒットラーの包囲に斃る九十万 眠るピスカリヨフ墓地春まだ浅き

(独軍の三〇〇〇日の包囲で九〇万人のレニングラード市民が餓死した)

ヒットラーの包囲破りし丘の上に ロシア人とともに樅の木を植う

(正面に向かって左側、奥から四本目の木)

潜行(のが)れたるレーニンの棲みし小屋ありて ラズリフの湖いま静かなり

レーニンの船着場てう白樺の 林の岸辺一人佇つ女童(めわらべ)

静寂(しじま)なるフィンランド湾白夜して 寒風のなかに佇ちつくす二人

北欧の白夜美しければ年老いし わが父親に一目見せばや

人間わばモスクワは散文 レニングラードは詩とわれは答えん

告 別 ・ ・ ・ ・ ・ 一 九 七 二 年 一 ・ 二 月

さむざむと冬の陽ざしはおとろえて 死への病いに臥し給う父

死に近きわが父なれど手をとれば やさしく笑みてわが子らを問う

死に近き父の手とればわが父の かけがえなさに涙あふるる

死に近き声なき父の手をとれば 極楽浄土よあらまほしけれ

みぞれ降る朝明け道を走りたり いまわのきわの父を呼びつつ

常総の吹雪く野面をディーゼルは あえぎ急げど父ははや亡し

頬こけて冷たき面に顔を当つれば 父の臉にわが涙落つ

冷たきは父の額なり顔あてて その冷たきに永久の別れす

近所なる孤児(みなしご)の童女あわれなり 父の枕辺掌を合わせ哭く

中西 功さんの死に・・・・・・・・一九七三年八月

強風の吹きわたりける夏の夜に 功は散りぬ多きを残しつ

夏までの命なりしを生き抜きて 立秋すぎて功は逝きぬ

悲しみと口惜しさの交る心地して 功を慕いて熱帯夜に佇つ

鵜沼の古びたる功の自宅にて 心血注ぎ書きあげし「意見書」

(一九四九年、中西功、佐藤昇さんの書いた共産党批判書)

「意見書」に感動しつつ配りしに たちまち届く反党の絡印

(これが遠因で私は共産党を離れた)

追録

ただ一度母にわがまま言いしことあり 小学二年農協購買部にて
購買部にて新品の服買い呉れし 野良着の母に抱きつきしわれ

父のため酒買いに行く道暗かりき 暗きをさけて遠回り行く

初児をば実家に預けて共稼ぐ 妻は夢路に子をあやしつつ（一九六三年五月）

ひと月に一度のわれをいとはしやぎ 迎える汝よ吾子なればかや

氷雨降る東大病院の中庭に 雫たらしつ佇ちつくす義母

さもらしく議論はすれど空しかり かくて過ぎにし三年にてあれば

（ある政治グループの会合で）

常東の野に馬を駈るといふ安仁は 農民運動に果たして向くか

（雑誌『現代の理論』編集長・安東仁兵衛さんの若さ日）

イヴなればはしやげる子らを抱きよせて 今年もわれはかなしかりけり

大傷に苦しむ吾子を見守りつつ 旅立つ朝の心は裂けつ

（一九七三年六月五日米沢へ出張）

II 詩集

山里の子

おお

子供らよ

大人であるわたしは

子供であるきみたちにあつく感謝する

きみたちの三倍も生きてきたこのわたしが

きみたち幼い子供らに

心の灯をとぼしてもらった

わたしはいま

きみらの贈り物をもって

この山深い村里を去る

きみらは柵のところではいばいを言い

わたしは汽車の窓ではしたない涙をかくす

きみら 山の子供らよ

きみらの心と わたしの心とが

いま

ただの結ばれ方でなく結ばれていることを

信じてくれるか

ああ ポリエチレンの袋におよぐオタマジャクシよ

ああ ガーベラと百合と野菊の花束よ

そして ああ 来年花咲くようにとチリ紙に包んでくれ

た名も知らぬ野花の種子のひとつまみよ！

(一九五二・七)

失恋

よろこびの時は火花のように短いのに
苦しみの時は嵐の夜のように長い

あなたはいつてしまった

小暗い三月のぬか雨のなかを

私の胸に嵐をのこしたまま

私は帰ってきた

小雨に沈む東京の西の端へ

ざわめく森の底知れぬ暗さの道を

還らぬ人の名を呼びながら

私は雨のなかで飯を炊いた

私は雨のなかで魚を焼いた

私は涙のなかで飯を食べた

私は涙をぬぐってお茶をすすった

そして私はいま出発する

この美しき悲惨から

(一九五三・三)

教奇屋橋にて

娘が泣いている

灼けた石橋の傍で泣いている

背中で赤ん坊も泣いている

娘は乞食のようだ

乾いた髪 破れた服

赤ん坊はやせて裸

娘の胸はふくらみかけて

ふくらみ切れぬ青春がおののいている

娘の傍を車が駆けぬけ

ジャズが流れ ネオンがまたたく

人があふれ 衣服があふれ 光があふれる

真昼の太陽は力一杯輝くのに

何という暗い景色だ

真夏の雲は天までかけ昇っているのに

俺の心は 低くたれこめる

(一九五三・六)

アメリカ中古

はき古した

もらいものの

ズボンをはいて

アメリカ仕立ての

中古上着を

のっぺら着込み

三カ月月賦

二〇〇〇円の

赤短 はいて

おれは毎日

街を出歩き

工場をめぐる

つんつるてんの

白けたズボン

伸び切った

コゲ茶の上着

ウインドに

うつる姿が

ときどき

いやにもなる

しかしあいつも

上から下までアメリカ中古

靴もズボンも

上着もそうだ

みんなサイズが

あつてない

あいつもときどき

ウインドのぞき

顔をしかめる

こともあろう

なかにや女房の

赤いセータを

得意に着込んで

くるのもいる

アメリカ式も

時には役立つもんさ

(一九五三・六)

神経衰弱

それは事実なのだ

二人の人間

体の不自由な五人の母親と

印刷屋で働く一人の娘とが

ひと月三千五百円で生きているのは

麦だらけの粘りのない飯に

味噌をつけ塩をふりかけ

黙って毎日食べている

お菜（かず）はいつも葉っぱばかり

そうして毎日暮している二人の人間

それが自分の身近かに暮らしているとき

それが辛くないのは人間か

ときどきそれを想い出し

仕事を手につかなくなることが

「動揺的」で「日和見」なのか

心臓が泣くのを聞きながら

乾いたパンを食べながら

沈んだ顔になることが

どうして「神経衰弱」なのか

子供たち・一

私はみた

昨日もみた 今日もみた

明日もまたみるだろう

青白くやせた子供たち

おどおどした子供たち

こき使われる子供たち

じゃまものにされる子供たち

遊び場のない子供たち

街角に汚れて群がる子供たち

その無数の子供たちを

子供を生むことが不安であるかぎり

子供を育てることが苦しみであるかぎり

いまがそういう時代であるかぎり

私はみつづけねばならぬ

自由に伸びられぬ子供たち

われわれの子供たちを

(一九五三・一〇)

子供たち・二

《どうしてびんぼうなおうちは

みんなちりぢりになるの

もうみんなかえってこないの

おかあちゃん

おとうちゃん おにいちゃん》

(「風の子」より)

これはかなしい詩だ

貧しさに抗議する

幼な子のせい一杯の言葉だ

親と子のきずなを

兄弟同士のきずなを

それら全体と ふるさととの結ばれを

ひややかにひきちぎり

ひきさいていく力

貧しさというこの無慈悲な力のために

どれだけの子供らの

やさしい心根が

うちくだかれていったことか

(一九五三・一一)

お陀仏

お前だけなら 負けてもいい

二、三の人には軽い嘲笑を

一、二の人には止めどない涙を

そして五、六の人にはただの沈黙を
もたらすかも知れないだけだ

地球は

お前のお陀仏とは何の関係もなく

ありふれた明日を迎えるだろう

お前が負けるということは

お前と同じような あるいは

お前以下のところで生きている

決して少くない人びとに

冷たく背を向けることだ

その人たちに

お前たちも負けてしまえと

言うにひとしいのだ

お前のお陀仏の

歴史的意義はゼロ

社会的意義はマイナス

芝生の娘たち

若い娘が四人して

冬の芝生にやってきた

とたんにはずかな芝生は

笑いとさざめきに覆われてしまった

芝生には

僕と彼女らしきいなかったのに

そうだ 娘たちよ

力一杯笑い給え

声のかぎりさざめき給え

きょうは日曜日

早春の野はこんなにも晴れやかだ

きみたちは今日という日を

いく日も前から待っていたことだろう

きみたちは親しげだ

きみたちは好意的で友情的だ

きみたちは僕など眼中にない

きみたちは早速食べはじめた

グリーンのセーターの娘よ

煙草など喫って大丈夫か

その藤色のワンピースの娘よ

果物は食事のあとがいいぞ

黒いパンプスを脱ぎすてた娘よ

そんなに水をガブ飲みするもんじゃない

赤いジャンパーの娘よ

ここへきて

そんなに無口でいるもんじゃない

明日からはまた働かねばならぬ

カレンダーと時計が

きみたちをまたとらえるだろう

娘たちよ 心から愛せ

今日の少し寒い自由を

(一九五四・二 深大寺公園にて)

ある寝物語り

どうして東京さ出て来る気になった？

・・・

嫌なことがあったのか？

・・・

東京で働く気かな？

・・・うん 勉強もしたいし・・・

汽车租赁はどうした？

Kちゃんが呉れた

ゆんべはどこさ泊った？

・・・電話のボックス

寒かったんべえ！

うん

眠れたか？

・・・

家で心配してべ？

・・・

淋しいか？

うん

おふくろがいてくれたらなあ

・・・

とにかく今夜はゆっくり寝ろや

うん

人間 希望を捨てちゃ駄目だぞ

•
•
•

外は冬だったが

静かな風が吹いていて

そこまで春が来ているような按配だった

部屋のなかは温かかったが

肩よせ合った二つの心は

まだ乾いたままだった

ここに一組の兄と弟が

隙間風吹く四畳半に一枚布団を延べ

肩よせ合って大人しく呼吸している

窓の外は相変わらず冬の風

窓のなかにはようやく寝入った一つの吐息と

眠らぬ一つの吐息が生きていた

(一九五四・二)

目白駅にて

かれは異常者だったのだろうか
それとも

昭和の日蓮様だったのだろうか

つまり 今夜

電車が池袋に近いある駅で

まばらな乗客をのせて静かに停まったとき
闇のなかから声があつて叫んだのである

「諸君！ 地球はわれらの住み家だ！

赤も白もない！ われらは地球市民だ！

皆仲良く暮らそうじゃないか！」

ドアが締まり 声はとどえたが

その上ずった声からして

かれが昭和の日蓮様であるには

すこし無理があつた

まばらな乗客のなかで

かれの声に気を留めたのも僕だけのようだった

シグナルが雨のなかで青になった

電車は雨について速度を増した

外出

お前はどこへ行くのだ
ヒゲなぞきれいに剃り込んで
ついでに剃り込んで
赤く血の出た面の皮に
メンタムなぞすりこんで
ついでに頬っぺたにもすりこんで
まぶしい程の爽快さに顔をしかめながら
洋服の埃を両手ではたいて
一体お前はどこへ行くのだ

お前は歩き出しながら
まだ行先を決めかねている
手に荷物など提げて
かなり忙しそうにアスファルトを蹴っているが
いぜんとして

お前の行き先は
不明 不定である

ともかく しかし
お前は歩け
こんなうらかな春の日和を
六畳一間にくすんでいる手はない
どこなりと訪ね給え
どこなりと歩き給え
たとい相手がいなくても
訪ねることは重要な行為だ

○ちゃんの「革命」

そうだ

あのヒゲのおやじ

○ちゃんの頭のなかでは

「革命」とは 何か こう

すべて良くなっていくことの代名詞なのだ

○ちゃんにとっては

未来への期待は すべて

「革命」の名を冠して称ぶに値するのだ

たとい

その期待が

どんなに荒唐無稽であろうとも

どんなに手前勝手な妄想であろうとも

それに「革命」の名を冠して称ぶ

あの 五〇を過ぎても

一向にうだつのあがらぬ

善良で しがないおやじの心根を

笑うことが

とても できようか

くたびれ果てた家計

部屋中 波打っている畳

いつも眠っているような女房

手のつけられぬ育ち盛りの子供たち
それやこれやをどうすることもできず
滅入る心を酒にはらし
われとわが身は無軌道に追いやる
あの ○ちゃん

いま 人生の黄昏に立って
ついにいまだ

本当の暮らしの一頁ももったことのない
あの ヒゲのおやは
今夜もまた酔いしれて
鼻水と涎と涙を混ぜて

「革命」の歌をうたっている

「晴れた五月に青空に・・・」
歌っている

「世界をつなげ花の輪に・・・」

(一九五四・五)

おくれた人

ああして毎日

彼女は事務所で働いている

別に気ばりもせず改まりもせず

さらさらと毎日

経理事務を片づけている

紅葉の頃には三十にもなろうという彼女は

それでいて 目をみはるほど若くみずみずしい

僕なぞ すっかりそれがうれしい

僕なぞ すっかりそれがとおとい

ところが きみは

彼女はおくれた人だとい

あたり前のふつうの人だとい

大事な話はできぬとい

組合運動の話はできぬとい

まあ ただの事務員さ という

ばかな

彼女は あれで結構

きみが考えている以上に みっしり

仕事をしている

つつましく ありふれて

精一杯に生きている

このもったいない程の結構さについて

きみはもつと思ひ知れ

すすんだ意識とやらをふり回し

ふつうの人をおどし 傷つけ

表だつてはともかくも

陰では少しもあてにされていないことに

気づきもしない「大衆の指導者」こそ

きみ 僕らの言葉で おくれた人というのだ

それ程気ばりもせず

さらさらと しかし確実に働いている人の

その努力の本当の値うちを

きみはもつと人間の尺度で測れ

コチコチにでき上った

意識とやらの物差しもってきて

はい三センチ はい五センチ まだまだ式の

そんなたわけたやり方で

人間を測る馬鹿らしさを止めよ

きみ

考えてもみろ

労働運動とは ありふれた しがない人たちの

精一杯生きる姿だ

すでにしてそのことをとおとへ

すでにしてそのことをよろこべ

すでにしてそのことをいとおしめ

(一九五四・五)

そば屋の娘

彼女の左手に

指輪が光っている

それはよいことである

彼女の瞳はキラキラ光り

物腰に落着きと香りが滲んでいる

それはまことによいことである

私は この

そば屋の娘の

やや遅れた婚約を心から喜ぶ

(一九五四・五)

三鷹の街で

止し給え 止し給え

そんな歩き方は 止め給え

男が胸を張って一歩前を歩く

女が前かがみになって一歩後ろに行く

お互い礼をつくしたつもりでいるのか

止し給え 止し給え

そんな歩き方は止め給え

(一九五四・六)

音のない言葉

ほら

きこえるでしょう

ささやくような

突風のような

津波のような 空気の流れ

あれは ほら

音のない言葉の流れる音です

言葉になり切れなかった

無数の人びとの

無数の想いが

言葉になれる温度を求めて

さまよい 流れていくのです

(一九五四・九)

下田と志村

T子さんが

伊豆の下田でそば屋をしていると聞いた

僕のことをまだ覚えていて

会ったら呉々もよろしくいって呉れといっていたと聞いた

子供を自転車のケツに乗つけて

街なかを走っていたと聞いた

子供も可愛いかったが

T子さんの美しさがやはり人目を引いていたと聞いた

伊豆の下田を

板橋の志村と聞きちがえて

明日にでも早速出かけようとした僕は

実に馬鹿だ

(一九五五・五)

俺と太陽

俺は あの日

利根川の土手に座り込んで

ぐるぐる燃えておちていく太陽と

長い話をした

その時から 俺は

太陽と義兄弟の契りを結んだのだ

おたがい 困ったときには

助け合おうと誓ったわけだ

奴は馬鹿正直だから

約束どおり

いつも俺を助けてくれるが

俺は自分のことで手いっぱい

いつも 夕方

ちよつと挨拶するだけで

親身にあいつの苦勞を

考えてやったことはない

そんなわけで

とんと不義理を重ねているが

そこを 少しもかまわぬところが

また 奴の偉さだ

きょうも 俺は

困ったことがあって

あいつに相談にいった

真昼間は 奴も忙しいから

相談するのは いつも夕方

おたがい 仕事じまいの頃に限る

きょうは

お茶の水の橋の上から

奴に言葉をかけた

神田川の水は まったく

日ましに汚れていく

堂々と沈んでいく奴に

かいつまんで用件を告げた

そしたら 奴さん

いつになく さりげなく

「思い出を大事にしろよ」

と言ったきり こつちをにらみやがった

野郎 つめたくなつたな

俺は そう思つて

喫いさしのバットの殻を投げてやった

だが その時はもう

奴がいつも自慢している

あの馬鹿でかい夕映えしか

俺の目には入らなかったが・・・

だが いつもそうだが

奴の言葉には重みがある

かめば かむほど味があるってわけだ

「思い出を大事にしろよ」などと

えらそうな言葉をぽつきりひとこと

吐き出して いっちまったが

考えてみれば なるほど

俺が 誰より奴を信じているのも

実は この「思い出」って奴のせいなんだ

俺が 筑波の麓の

土臭い町に生まれおちて

嫁の欲しい年頃まで

長いこと生きてきたあいだ

奴は いつも俺と一緒にだった

あの頃も 今も奴は全く少しも変わらぬ

いつも真っ正直に生きている

いつも燃えるように生きている

そうだ

あしたの朝まで奴は来ぬから

ここで 奴の話をご披露しよう

奴は とつても純情なんだ

自分の口から言うことは絶対ないから

かわりに 俺が話そう

奴は 実は

あのお月様が好きなんだ

あの 慎しみぶかく あでやかで

奴なんぞよりはるかにエレガントな

あの お月様に

奴は前から参っていたんだ

すでに長すぎる恋に悩みながら

いまだにそれを打ち明けることもできず

月が昇る頃になると

奴は たちまち

顔を真赤にして沈んでゆく

あの途方もなくぜいたくで

尨大きわるまる夕映えの道楽も

このことと関連して

たしかな意味がこめられている

月の出の舞台の端を

思いつ切り気前よく
飾りたてているのだ

それでも　ときどき

あふれ出る愛の衝動に

大きな胸を痛めることがあるようだ

だが　奴が大物であるように

お月様も　また

桁はずれてエレガントだ

ともすれば

奴の仕事の真っ最中

つまり

晴れ渡った真っ昼間の大空の一角に

お月様が　ひっそり

たたずんでいることがある

あれは　あの

お月様の尨大な優しさの現れだ

そんな日の夕方は

あの太陽の大将め

疲れた体をものともせず

この大天空の　たしかに半分を

壮大な夕映えにとかしこむのだ

(一九五五・九・未完)

ふみちゃん

ふみちゃん

ぼくは知ってるよ

ふみちゃんが肺病で死んだことを

誰もいない部屋で

一人で死んでいったことを

ふみちゃん

ぼくは聞いたよ

医者が来たとき ふみちゃんは

もう死にかけていたんだね

それなのに ふみちゃんは 毎日

熱さましの粉薬を飲まされていたんだね

ふみちゃんが死んだ あの部屋

ぼくは覚えているよ

だだっびろいー〇畳一間

それでも皆が寝ると狭かったそうだね

障子がなくて

寒いときは昼間でも雨戸をしめて

暗くていやだと言っていたね

ふみちゃん

どうして十三位で死んじゃったの

いつも太って

赤いホッペをしていた ふみちゃん

いつも元気で

子守をしながら母ちゃんを助けていたふみちゃん

いちどは 東京へ行ってみたい

いちどは 海をみてみたいと

いつも 言っていた ふみちゃん

ふみちゃん

まだ皆 ふみちゃんのこと覚えているよ

ふみちゃんのこと話すと

よっちゃんも とみちゃんも 泣くんだよ

母ちゃんは いまでも人にあうたんび

すまないことをしたって

あやまっているよ

でも

母ちゃんが悪いわけじゃないよ

母ちゃんは今も毎晩皿洗いに行ってるよ

父ちゃんはダムの現場だし

よっちゃんも とみちゃんも出稼ぎだから

今あの部屋で寝ているのは母ちゃんだけだよ

だから よけいにふみちゃんが

恋しいんだよ

ふみちゃん

いつもぼくに聞いていたね

おじさん 貧乏な家はどうしてみんな

ちりぢりになるのって

ぼくは いつも困って

いつか大人になったら分るよって答えたね

でも ふみちゃんは

大人にならないうちに 死んじゃったね

とうとう答えが分らないうちに

死んじゃったね

ふみちゃん

今夜は星もないよ

まるで ふみちゃんのことを思って

空まで かなしんでるみたいだよ

(一九五五・一一)

子供たち・三

——アル日ノ教室ニテ・ラジオヨリ収録——

ボクワ ジエイタイニナリタイ。ヒヤクシヨウワ イツ
マデタツテモ イラクナレナイカラ ヤダ。

イラクナレナイカラ ジエイタイニナルトユウノワ ヘ
ンダトオモイマス コウフクニナレナイカラ トイツタ
ホウガ ワカルトオモイマス。

ヒヤクシヨウワ コウフクニナレナイノデスカ。ヒヤク
シヨウノコドモワ ジエイタイニイカナイト コウフク
ニナレナイノデスカ。

ワタシモ タマニワ ブタニクオ タクサンタベタイト
オモイマス。オカアチャンワ コドモダトオモツテアソ
ンデバカリイテワダメダトイイマス。デモ コドモガア
メタベテ アソンデイテモイイヨウニナラナイト ダメ
ダトオモイマス。

野の花

花よ 野の花よ

こんな山奥の こんな淋しいところに
たった一人で咲いている野の花よ

お前を誰が見るだろうか

お前を誰が愛でるだろうか

それでもお前は 美しく咲いている

春の光のなかで 全く咲き匂っている

さびしくはないか 花よ

こわくはないか 花よ

つまらなくはないか 花よ

花よ 野の花よ

お前は美しい

お前は謙虚だ

お前はまじめだ

僕は好きだ お前が大好きだ

花よ 野の花よ

僕はいまお前を見つめている

しかし二度とお前を見ぬだろう

僕はまもなくここを去る

お前もやがて咲き終るだろう

花よ 野の花よ

かわいい花よ かぐわしい花よ

やさしい花よ さびしい花よ

気高い花よ

精一杯咲いている けなげな花よ

もうそろそろ時間だ

僕は東京に帰らねばならぬ

行くぞ 花よ

いいな 花よ

(一九五六・五 信州にて)

遠足

どうしてだろう

君たちを見ていると

どうしても涙が出てきてしまうのだ

心が平和になって

心が清らかになって

心にわらべ唄がひびいてきて

心にやさしさがあふれてきて

そのあげく 涙が出てきてしまうのだ

子供たちよ

小学校の子供たちよ

遠足にきて 緑の草原で

弁当をひろげている子供たちよ

握り飯を食べながら

ミカンの皮をむきながら

水筒をラッパ飲みしながら

キャラメルの箱をあけながら

すましたり じやれたりしている子供たちよ

真っ青な空に白い雲があつて

さんさんと太陽が輝いていて

むせるほどの緑があつて

若い女の先生がいて

年よりの男の先生がいて

遠くで牛がなっていて

お百姓が車をひいていて

そうして　そこに君たちがいて

ここに　僕がいて・・・

どうしてなんだ

どうして君たちを見ていると

こんなに涙が出てきてしまうのだ

(一九五六・五　信州にて)

出勤の朝

朝霧をついて仕事に出ていくとき

オレは自分の神々しさに

われながら驚くくらいだ

こんなオレに

誰かが後ろで手を振ってくれていないかと

誰もいない野道を振り返って見る

(二九五六・九)

二十七歳の暮れ

この一年 僕の身長はいぜんとして一七五センチであった
体重は六七キロを超えることがなかった

近眼の度はやや進んだが

とりわけひどい不自由はなかった

この一年 僕は三人の新しい友を得

二人の古い友を失った

数十人の人びとと共に仕事をし

数百人の人びとと必要な話をし

数千 数万の

ただ同じ時 所にいただけの人びとと

朝に日に夕にさまざまの出会いをした

しかし とりたててすばらしい出会いはなかった

この一年 僕は生まれて初めての講演を二つこなし

三つの調査報告をまとめ

四県を旅した

しばしばスランプに陥り 自信を失くし

お先真暗の日々もあったが

死ぬ程のことはなかった

この一年 僕は亡き母を恋い

生きている父を偲び

病んでいる弟を想い

心が千々に乱れることもあったが

空を流れる雲や 朝日夕日に励まされて

道を踏み外すことはなかった

この一年 僕はそれ程不幸ではなかったが

さして幸福でもなかった

この一年 僕は歳月の早さをとくに感じた

年の終わりに この平凡な一年を僕は静かに見送る

二度と還らぬ二七歳のこの年を送る

(一九五六・一一)

老婆と「社会主義」

彼女は子供の頃視力を失くしたまま

もう七〇に手が届きそうであった

それでもシャツのつぎ当てや雑巾さしはしているのであった

貰い子の息子が一人いて

東京で地下鉄を掘っていた

夫はこんにやく屋で釜炊きをしていたが

仕事場で大火傷をして病院で死にかけていた

息子は飛んで帰って金を置いてまた飛んで帰った

こんにやく屋には労災保険もなかったのだ

老婆はすっかり弱った

誰もいなくなったトタン屋根の下で

老婆は夜っぴて念仏を唱えた

老婆はひよこひよこ頭を下げて私を拝んだ

手を合わせる老婆の姿は幼な子のように小さかった

こんにやく屋から金を取ってくれと私を拝んだ

白く濁った目玉から固まって水滴が落ちた

老婆はしきりに死にたいといった

しかしいまはとてもしねないともいった

私は老婆のしなびた手をにぎり

早速こんによく屋に行くことを約束した

私は起ち上がりながら

社会主義の話をしてみた

失業のない話

病気も怪我也んぶただだという話

老後の不安もない話

すると老婆はいきなり膝をのりだし

白い目玉を私に向けて声を挙げたのである

「あれえ、そっちの方さ、引越せめえけ」

(一九五七・九)

かなしみ

とりわけてきょう僕はかなしいのだが

誰かが死んだためでもないし

親しい人に別れたからでもない

死んだらかなしいと思う人はまだ生きているし

別れたらかなしいと思う人とはもう別れてしまった

すべて目に見えるかなしみには

人一倍つよい僕だ

とりわけてきょう僕はかなしいのだが

敷布団の綿がハミ出してしまったからでもないし

狭い暗い借り部屋に油虫がわいたせいでもない

破れた布団はつくろってくれる人がいるし

暗い部屋でも天気の日は少しは明るい

すべての不愉快なことに

かなりがまんづよい僕だ

とりわけてきょう僕はかなしいのだが

給料の遅配欠配が重なったからでもないし

べ切過ぎた論文がまとまらないからでもない

遅配欠配に苦しんでいるのは僕だけではないし

論文はあと二、三日頑張ればまとまるだろう

貧しい上に忙しいという暮らしには

すでに永らく慣れてきた僕だ

とりわけてきょう僕はかなしいのだが

それは生きていることのかなしき

いのちがあるということのかなしきを

知ってしまったからだ

だから このかなしみは

僕の生きているあかし

僕のいのち

モスクワに告ぐ

おれは寝袋いがいに

何も要らぬコマンド

ベッド・ルームの赤ランプよりも

川つぷちの土手の夜露に濡れていた

羽根布団にふかく抱かれるよりも

山の岩磐に寝て星と語りたい

おれは敬礼する

モスクワの赤い星よ

拒否してきた

数々の慰めの季節の彼方に

お前はいつも傲然と輝いていた

おれが徹夜でつくる

精度まちまちの作戦地図には

赤の広場からコンパスした線が

いつも一本入った

だがモスクワよ

お前は知っているか

お前のひと呼吸のタイミングが

少しずれただけでも

お前の一挙手の方角が

少しゆがんだだけでも

全世界の左翼が大量に生き

そして 大量に傷つき死ぬことを

モスクワの赤い星よ

お前の赤は

人の心を凍らせる赤であってはならぬ

お前の赤は

見る人の心を温め励ます

太陽の赤でなければならぬ

(一九五七・一一)

私の土地

A 駅とK 駅の間

K 駅に向って線路の左側

つまり東側なのだが

そこに恰好の土地があった

平坦な五百坪ばかりの土地で

一見して牧草地風だったが

周囲の松林や麦畑に調和して

一幅の水彩画のようだった

私は朝夕の通勤電車の窓から

その土地を眺めるのが好きだった

その土地に朝もやが立ちこめていた日

蝶が舞っていた日

陽炎がもえ立っていた日

夕立に打たれていた日

落葉が敷きつめていた日

そして 白雪に覆われていた日

私はこよなくこの土地を愛した

そしていつしか

この土地は私のものになっていた

私はこの土地に

広大な邸宅を配してみたり

内心 些か良心がとがめて

雨露をしのぐに足るだけの

掘立て小屋を配して

晴耕雨読の日々を想ったりした

ところが ある朝

例によってその土地に眼をやると

重大な異変を発見したのだ

「○○社有地」と特筆大書した

原色の大看板が まるで盗人のように

あの土地のど真ん中に

突っ立って私をへいげいしている

いらい私は ついに

この土地に眼をやることがなかった

クリスマス・イヴ

妻は泣いていた

生まれたての赤ん坊と一緒に泣いていた

流感のため隣室に隔離されている五歳の長女も大声を挙げて泣いていた

この

クリスマス・イヴの

皆が少しは楽しげに過ごそうとしているひととき

わが家では親子三人が泣いている

妻は赤ん坊が泣きやまないといって泣き

長女は母親がかまってくれないといって泣き

赤ん坊はうまい育て方を知らぬ母親に抗議して泣いている

私は電灯をつけ

ストーブをたき

お土産を開いて

雨戸を閉めた

妻のすすり泣きは

私への抗議でもあるだろう

赤ん坊が浅い眠りについてからも続いていた

想えば互いに辛い四年間だった

四年前私は故あって町の議員になった
党の支部をつくり書記長にもなった
ிரை四年間

私は片道二時間の東京への通勤の外に
ママゴトのようながら

党務と政務を兼ねて働かねばならなかった

休みがちの僕に職場の目も厳しくなった

日曜も祭日もなくなり 睡眠時間は三、四時間になった

家族で食卓を囲むこともなくなった

わが家はいつしか母子家庭になっていた

四年前まで わが家は実に楽しかった

一七〇坪の庭に

梅 桃 桜が次々に咲いた

柳が風にそよぎ 柿 栗が繁った

四季 花々が咲き乱れ

ひょうたん池で蛙が鳴いた

三本の柿が実ると 私が登ってもぎり

長女が拾い

妻が樽漬けして渋を抜き 近所にも配った

だが 今は梅も枯れ 雑草が茂り 池も涸れた

いやだ こんな暮らしはもう終わりにしよう

また皆で楽しく食卓を囲める

ふつうの暮らしをとり戻そう

僕も四年間市民的義務のため頑張ったが

勤めと党務政務の両立はとてもムリ

町長やK代議士はぜひ政治家になどというが

そんな気はサラサラない

痛いほど分かったが

政治を論ずることと政治をやることの間には天地の距たりがある

政治をやる人を僕は半分尊敬し 半分軽蔑する

政治はすばらしいが

みにくくもある

そのみにくさに我慢できぬ私は

とても政治家には向かぬ

あのドスの効いた笑い声など

とても僕には真似できない

誰彼となく手を出して握手を求める

あの厚顔ぶりも僕は好かぬ

オモテとウラの使いわけ

笑って政敵を刺すあの冷酷さ

抱負経倫で政治家になれる土壌は

この日本には ない

Tさんへの義理から始まった四年間

苦しかったが 得難い経験でもあった

だが もうおさらばしよう

僕の本命はやはり自由な研究者暮らした

あした早速 Tさんと話をつけよう

妻はようやく静かな寝息になった

私は合掌しながら

ひとりイナリ鮫を口に運んだ

(一九六七・二)

III メモ帳より——貧しき時代の貧しき人々のこと

ある金話

六月の雨が降ったり止んだりしていた。頼りなくなる程静まり返った昼さがり。矢のように飛び交う燕だけが、この静寂にやっと生気を与えていた。

細い田舎道が、一方に小高い山塊を抱えこみ、一方に段々になつた狭い水田を見下しながらうねうねと続いている。赤土がかつたこの細道の水溜りをピチャピチャ踏みながら、十七歳位の娘を頭にした三人姉弟が、みすぼらしい身なりで黙って歩いてくる。弟妹に挟まれて歩いている頭の娘は、古新聞に包んだアヤマやアジサイや山百合の一束を抱えている。そして時々鼻を花に近づけては、その香りを楽しんでいる。彼女の着ているレイン・コートはすっかり変色して、白が黒ずんだ黄色になっている。左のポケットのところ、接着剤で穴をふさいだらしい不器用な細工のあとが見える。

連れの弟は十歳位で、ヨレヨレの霜ふりの洋服とズボンをはき、ハダシで歩いている。妹は十三、四にもなるうか、体つきは姉よりガッチリして見えるが、その身なりは一段と姉に劣っている。二人の姉が丸々と肥えているのに反し、末の弟は青白くやせていて、見るからに栄養の足りなさを感じさせる。

弟「姉ちゃ、こんだいつ帰ってくんのか？」

姉「わがんねなア、んでも、なるたけ暇めつけて帰ってくつかんな。んでもわがんねなア、いつになつが」

弟（生き生きした表情で）「姉ちゃ、こんだ何買ってきてくれる？」

姉（姉らしく）「うん。何がええんだ、ヨシは？」

弟（しばらくもじもじ、やがて思い切って）

「姉ちゃ、オレ何でもええけんど、洋服がええな」

姉（つき放すように）「洋服？、馬鹿言つてらア、ヨシは」

弟（もとの淋しげな表情に戻る）「んだらええや」

姉（急に追っかけるように）「んでもヨ、ヨシよ。い

つかはきつと買ってきてやつかんな。待つてんだど、ヨシは！」

ここで会話は止んだ。姉はまた鼻を花に近づけた。妹は顔を真っ赤にしながら姉と弟の会話を聞いていたが、ここで急に微笑んだ。彼女の足の親指がズックの破れ目から顔を出した。

三人は黙って歩いていく。雨は小止みなく降って、道の傍の農家の生け垣からアジサイの花がほの白くにじんで見えた。

おみくじ

きょうの夕方、古祥寺のそば屋でうどんを食べていると、十八位の娘が店に入ってきて、僕の左手前のテーブルに座った。そして前掛けのポケットから十円玉を1つとり出し、おみくじ器のなかに押し込み、ポンと威勢よく小さく丸めた紙切れをとり出すと、何も食わずにそのままひっそりと表へ出ていった。

(一九五三・九)

夫婦げんか

今日は日曜日。隣では1日何べん夫婦げんかをするのだろう。ほとんどひっきりなしだ。そんなに憎いなら、いつそのこと別れてしまったらと、ハタでは考えもするが、本人同士はいつになっても叩き合いながら、しかも別れようとはしない。何という夫婦だ。夫婦の別れ話をぼくは何べん聞かされたことか。別れましょう、別れましょうと言いつつながら一生別れずに、一緒に死んでいくんだろう。その時、やっぱり別れなくて良かったと思うのだろうか。

自分の亭主にホーキで叩かれたあとをさすりながら、その亭主のためにメシを炊いているあの女房。ホーキで叩きまですた女房の炊いたメシを食べて、その上弁当にまでつめていくあのオヤジ。

(一九五三・一一)

少女の死

昨年秋深い十月の末、東京を遠く離れた上越の町に、わたしは二週間ほど滞在した。美しい自然だった。滞在中、宿の近くに住む一人の少女と親しくなった。その十二歳の少女は、胸を病んで療養の日々を送っていた。ふさふさしたおっぱ髪が、いつもきれいに梳いてあった。

雪のように白い肌。瞼と顔と唇のすきとおるような紅色。つぶらな瞳がいつもうるんでいて、空のどこかに自分の運命を読みとろうとでもするのように、いつも上の方をみつめるくせをもっていた。笑うとひととき美しく輝いた。その笑顔をみたいわたしは、会ったんび心ゆくまで少女を笑わせた。

わたしが東京へ戻るとき、少女はわたしを送ってきてくれた。いくら冗談をとばしても少女は余り笑わなかった。モスリンのような清楚な着物にほっそり身を包み、道々の野花をつみながら、黙ってわたしについてきた。

大分離れてから振り返ったとき、少女は袂をくわえてこつちを見ていたが、やがて身をひるがえしてすばや丘のかげに消えてしまった。

少女はきのう他界した。

(一九五四・一一)

三鷹・新川の居酒屋にて

土工Bは、突然、隣で呑んでいた四十がらみの、やせておとなしそうな商人肌の男を椅子ぐるみ叩き伏せた。Bはソラ豆のツマミを噛み噛み、俯向けにつんのめった男を平然と眺めていた。「何すんだい」。件の男は間が悪そうに立ち上ると、つき倒した土工Bに詰め寄っていった。だが、その声は弱く、すでに完全に土工Bに威圧された形である。

案の定、Bの向こう側でこの一部始終を赤らんだ顔で眺めていた土工Aが「俺の兄弟に恥かかせつと、テメエの頭をブチ割るぞ。来るなら表へ出る」と言つて威勢よく立ち上ると、この商人風の男は、口をモグモグさせて、わけのわからぬことを呟きながら、やにわに今まで呑んでいた焼酎のコップをとつて、猫のようにすばやく表へ逃げていった。コップには半分も入っていなかった。

この土工AとBは、僕が友人に誘われるままこの酒場——と言つても場末のうす汚い飲み屋だが——に入ったとき、すでにかなりできあがつていた。僕らが呑み始めると、特有のブッキラボーナ調子で話しかけてきた。僕を現場監督の某氏と間違えて要らぬ愛想を使つたり、背広で働く人間への羨望をブチまけたりしていたのである。

とくに僕が気に入つたのは彼らの社会批判であった。それはすべてにおいて正しかった。なかでも土工に対する世間の冷たい差別的扱いに対する批判は、粗野な言葉ながらふかい切実感がこもっていた。

「土方だからつて、なんで差別するんだい。何わるいこと、したつてんだ。どこへいったつてまともに扱いやしねえ。バカにしてる！ こないだもなア、乾物屋へ行つてツケで買わせるつて言つたら、土方の人はゴメンだとコキやがる。もう三年も顔見知りのクセにだ。こんな文句つてあんめえよ」。土方Aは絶叫するような調子でしゃべつた。BはAが自分の気持ちを代弁してくれるようなことをしゃべるたびに、酒を注いでやつていた。

「背広の野郎を羨ましく思うよ。ハラも立つがよう」「好き好んでこんな仕事やつてんじゃねえ。一ぺん土方になったら抜けられねえんだ。いまさら家へ帰つて百姓やるわけにもいかねえ。第一もう土地がねえ。死ぬまでこうして渡り鳥よ。いつになったらカアと二人で暮らせるかもわかんねえ。くそいまましい！」

こんなことをのべつまくなしにしゃべつては、僕らの同意を、その表現の荒々しさに似ず、心ではかなしくも求めているようだった。僕は陽気に、そして親愛の念をこめて、そのすべての不満ややるせなさについて同意と共感を示した。彼らはいささか満足したようだった。

そこへ、突然この出来ごとである。始めは何か起こつたのかよく分らなかつたが、聞いてみるとかの商人風の男が、土工Bのすすめたバットを断つたからと言ふのだ。

「奴はバットなんか喫えねえだよ。たとえ喫えなくなつて、ともかく一旦は気持ちよく受けて、そのあとで捨てるなり何なりしろつてんだ。土方をバカにするのもいいかげんにしろつてんだ。土方だつて人間のエチケツト位知つてらア」と言うのが土工Bの

言い分である。

しかし、僕の見たところ、この商人風の男は、ピースや光が口に合っていて、バットなど喫えないといった男ではない。ただほんとの遠慮から断ったに違いないのだ。

帰りぎわ、土工Aは僕らに向かって言った。

「あんた方は人間ができてる。俺たちを嫌がらず、ふつうに話してくれた。俺たちと平等だ。世の中皆こうなら苦労はねえ。俺は昔、中央線の熊と言われた男だ。傷害罪でブタ箱にも入った。でも、もうバカなマネはしねえ。何やつても損すんのはダメエだからな。アバヨッ」

二人は千鳥足で飯場の方へ消えていった。

(一九五五・一一)

銭湯にて

湯上りの子供たちの肌は、誰彼の区別なく平等に美しく見える。文句なしに上等である。しかし、ひとたび彼らがそれぞれの着物カゴの前に立ち、一枚一枚と自分の衣服を身につけはじめると、裸の子供たちが匂わしていたあの平等の美しさ、文句なしの上等な愛らしさが、かなしくも消え果てていく。

扉を開けて銭湯から出ていくとき、彼らは魚屋の子であり、八百屋の子であり、教師の子であり、百姓の子であり、失業者の子である。両親のある子であり、片親しかいない子であり、両親さえいない子である。北海道を見た子もあれば、海を見たことのない子もいる。満ち足りた子。いつも不足している子。すでにあきらめ顔の子。彼らが自分の着物を着終ったとき、社会は彼らをそれぞれの整理箱に区分けして、押し込んでしまふのだ。

(一九五六・五)

ラジオ修理

階下のお婆さんが、ラジオが壊れたから見てくれと言ってきた。僕はハタと困った。先日も一度頼まれて、ラジオの構造に関する知識が全く無いのにもかかわらず、いかにも一通り通じているような手つきでいじっていたら偶然鳴り出したことがあった。お蔭でその晩は大分ご馳走にもなった。

お婆さんがまた頼みに来だのは、その時の偶然の成功で信用を得ていたからなのだ。僕は仕方なく階下へ下りた。部屋に入ると息子氏がすでにラジオを分解してしまっていた。そしてどうしてもどこが悪いのか分らんと言う。僕より遥かに詳しい彼がそう言うのだから、僕に皆目分らんことは分り切っている。

しかし、僕はツバを一口呑み込んでから、仔細ありげにラジオに手をかけ、いじりまわしてから口を開いた。

「機械に異常はなさそうだね。とするとコードがわるいんだね」と言ってみた。息子氏は「そんなことはない筈だが……」と言いながら別のコードに変えたら、ラジオが急に鳴り出した。お婆さんと息子氏は、僕の「目のよいこと」に感心することしきり。ラジオ修理について再び信用を重ねることになった。罪な話。

(一九五六・一〇)

焼芋屋の少女

冷たい雨が一日中降り続いて、晩秋の暗い日曜日は静かに暮れようとしていた。私は雨に打たれながら暮色漂い始めた三鷹の街外れの通りを一人で歩いてきた。冷たく湿った私の心を温めてくれるものをさがしながら、しかし半ば諦めながら、雨に光るアスファルト道路を歩いていった。

私は、左手の屋並みの一角に目を留めた。バラック作りの鍍金屋の軒先に、三尺程の庇が突き出て、そこに雨が当って雫がたれている。その雫に体半分濡らしながら、サビついた焼芋器が狭苦しそうに納まって、生木をいぶしているような煙を、煙突から静かに吐いている。その傍らに一人の少女がうずくまって、小石で何か地面に書いている。古びたセーラー服に、すり切れたデニムのズボンをはき、背中には内から洩れた電気の光が鈍くさしていた。そのすべての背景から浮き出るように少女の長いふさふさした髪がひときわ立派にみえた。

私は百匁十三円の焼芋を買って十五円払うと黙ってそこを離れた。少女が売ってくれたのである。ほのかな芋の温もりが、雨に打たれて湿った心を、かすかに温めてくれた。

ふと、人の気配を感じてふり向くと、少女がそこに立っていた。

「これ、おつりです」と言っ、二枚のアルミ貨を差し出した。走ってきたのか、小さく息をはずませながら、雨に打たれる目をしばしばさせて、少女は私の顔を見上げた。小学校三、四年生位だろうか。その白い美しい顔の後ろにかなり暮色が濃くなっていた。賢そうなその顔立ちには、生きる重さをすでに感じとってしまったのか、あどけなさにきびしさがにじんでいる。白い大きめの歯をみせて表情だけで微笑むと、少女はまた走って行って軒先にうずくまり、こちらを見て僕が角を曲がるまで手を振っていた。

(一九五六・一〇)

古い友人と出会う

言葉をかけてくれて、ほんとに有難う。君がもし持ち前のハニカミから、僕が君の前を通りすぎるのを黙って見逃してしまっていたら、折角のまれな機会が生きなかつたろう。

実のところ、僕は君のことは忘れていた。呼びとめられて、呼びとめている君の顔をまじまじと眺めてみたが、こう、すぐにはどこのどなたで、この僕とどんな関係の人か全く思い出せなかつた。思い出せなかつたまま、これはしばらく、とは言ってみたが、あとが心配だつた。

しかし、君が急に早口にいろいろなことをしゃべり出したから、有難かつた。君の頭の中から足元まで一通り目をくれる間に、君がどこのどなたか見当がついた。だから僕は思わず、やあ、見違えるほどキレイになつたねえ、などと言つたわけだ。そしたら君、だつてあの頃はお化粧などしたことなかつたもんね。そうだつたね、皆いつも着た切り雀で、コツペパンばかり食べていて、それにコロッケを挟むとぜいたくだったり、おしやれと言えば床屋に行くこと位の時代だつたもんね。

いま、何してんのと聞いたら、ちよつと威張つた顔付きで奥様稼業よ、ときたね。でもその言い切り方がとてもよかつた。どこに住んでんのと聞いたら、北区よ、と言うから、ああ静かないところだね、と言つたら、何言つてんの、工場の真ん中よ、ときた。そうだつたねえ。うるさい、くたびれた、灰色の街だつたね、北区というところは。

やつと彼に食べさせて貰えるようになったわ、と言つていたね。そりゃほんとに結構だ。さあ、これで有り金ぜんぶよ、あと五〇円。とか何とか言つて、いつも底ぬけに明るかつた君がうらやましかつた頃を思い出す。

そしてその頃、君が僕に好意を待っているという甘ずっぱい噂が春の風のように吹きわたり始めたことも、ついでに思い出す。噂は所詮噂であつて、それ以上のものではなかつたが、別に苦の種にもならなかつた。何しろおたがいすごく若くて、未来にでつかい夢を持っていたから、いろいろなものが失われるのがそれほど苦にならなかつた時代だつたもんね。もつとハッキリ言えば、男だとか女だとかという分けへだてを、まだ余り感じなかつたように思うよ。

だから、君が派手なドレスなど着て、頭を丹念にウェーブさせて、化粧した顔で間近に立たれたりすると、全くどうも君が君でない感じがしてならないわけだ。いやそれもこれもすべて時の流れさ。人生という大河に、時々よりそつて流れるが、また離ればなれになる。そして時々大きな曲がり角で再び流れのなかで顔を合わせることもある。君がやがて母になり老婆になつていくとき、この僕は一体どうなつていいのか。

あなたも早く結婚しなさいよ、いいもんよ、二人の暮らして。と君は言つてくれたが、それを言葉通り受けとる程、若い身空ではなくなつた。もちろん、結婚に多くの願いをかけてはいるが、結婚したら万事バラ色などという信仰はもう卒業した。結婚が人生の目的みたいな誇張のほども分つてきた。

だからさ、ね、君。別れの言葉はもつと別のがよかったね。君は昔よく言ってくれたじゃないか。あなたはいつも人生を深いところで生きている人ねって。だから今日も、がんばってね、あなたはきつと大きな仕事をする人になるわよ。とか言ってくれていたら、そしたら、僕は完全無欠に今日の出会いを嬉しく思ったと思うよ。

(一九五七・五)

慈善

初秋の夕暮。時々小雨がおりてくる。ネオンが急に息づいたように光り始める。ピカデリー劇場先の橋のタモト。五つと三つ位の女の子が二人して薄暗がりにならずくまって、小さな空カンを前に置いている。

向こうから若いアベックが来て、この女の子に目を留める。女の方はすぐ目を背けて通りすぎる。男の方は女と組んでいた手はずして立ち止まる。ポケットから小銭を出したが、それをすぐ引っ込めて、別のポケットから紙幣をとりだし、カンの中へ押し込みながら体をかがめて二人の頭を撫でる。

「早くお家へ帰んな。ここ寒いよ」と声をかける。男、女に追いつく。女「いくらあげたの」と聞く。男「うん、百円札やっちゃった」。女「バカねえ、あんたって……」。それから二人は、かなり間隔をとって、口もきかずに歩いていった。

(一九五七・一〇)

空の色

午後一杯吹きまくった西風にすっかり吹き払われたかのように、雲一つない青空が寒々と夕焼に色づき始めていた。暮れなずむ畑中の道を、私はことし九歳のY子と手をつないで歩いていた。

「クボちゃん、何見てんの」

「うん、空だよ」

「アタイね、空ってキライよ」

「どうして？」

「だって、いくら描いても、あの色出ないんだもん」

(一九五七・一一)

〈わたしとふるさと〉

筑波山の雄姿を心の糧に

人それぞれに心の原風景というものがあるとすれば、私の場合、それは一にも二にも筑波山である。私は筑波の西方十五キロにある下妻という小さな町で生まれ、朝に夕に筑波山を仰ぎ見ながら十六歳までを過ごした。私の精神形成にとって筑波山は計り難いほどの意味をもつ。

十歳で母を病いで、一三歳で兄を戦争で失った私は、戦中と敗戦直後の苛酷な時代をこの山麓で生きた。少年時代のさまざまの悲しみや苦しみをふかく癒し、挫折や失意から立ち直らせ、望みを与えてくれたのは、いつも筑波山のあの雄姿であった。それは私にとつて、ときに母のごとく、父のごとく、神のごとく映じた。

筑波は眺める場所によって山容を変えるが、無論、私にとつての筑波山はわがふるさとから見る筑波山でなければならぬ。私は下妻東部の田園地帯から眺める筑波山が一番美しいと思うし、それ以外の場所からの山容にはかえって目をそむけたくなる。筑波山は下妻から見るにかぎるといまでも固く信じている。

小学校四年生のとき、初めて汽車に乗り横浜の姉の家を訪ねたことがあるが、次々に筑波山の形が変わっていきやがて見えなくなってしまうときは、異国に旅立つような緊張感と心細さに胸がしめつけられるほどだったことを覚えている。

両親の墓があるので、いまもたまに下妻に帰ることがあるが、実は筑波山に逢いにいくのである。時間がなくて墓参りができず、筑波山を眺めただけで帰ってきたこともある。筑波を眺めることは、両親や兄弟や友人や恩師に逢うことすべてを兼ねているように、私には思える。

ただし、私は筑波山いがいのふるさとの風景には、ほとんど興味がない。余りにも変わり過ぎていて、直視するにしのびないからである。いつか帰郷した際、母校の小学校や高校を訪ね、くまなく校庭を歩いてみたが、木造の校舎がすべて鉄筋コンクリートに建て替えられ、池も埋められたりして、私が学んだころの面影はほとんど無くなっていった。改めて、“いま浦島”の思いにかられたのであった。故郷を後にして四十余年、あの筑波山の雄姿いがい、わがふるさとはすべて歴史上の存在と化してしまったようだ。

〈神奈川県庁本庁舎正面玄関にて〉

今日は私たちの退庁式のために、こんなに大勢の職員の皆さんにお集まり頂き、誠に恐縮に存じます。

私は今、この正面玄関の前に立ちまして、今から一六年余り前の昭和五〇年四月二三日の朝のことを鮮やかに想い起こしております。空はきれいに晴れておりましたが、肌寒いような朝でした。銀杏並本の新緑が目には滲みるようでした。バルコニーから紙吹雪が散り、五色のテープが舞っておりました。まさに興奮と感動に包まれた長洲知事の初登庁の朝でございました。

そして私もこの日、人混みにもまれながら、この階段から県庁生活への第一歩を印したわけであります。その時、長洲知事の学者時代の愛弟子の一人である、ある大学の先生から「久保さん、最低二年は頑張つて長洲さんを支えて下さい」と言われたことを覚えております。私は内心三カ月、できれば半年は頑張つてみようと思つていたわけです。政権交替期の雑用を済ませたら、早く自由の身になりたい、というのがその時の私の本音でございました。県庁の仕事に自信がなかったのも事実であります。

ところが、いつしか半年どころか、二年どころか、早くも一六年の歳月が流れてしまいました。まさに感慨無量であります。県政について全くの素人でありました私が、こんなに長い間仕事を続けることができたのは、本当に大勢の職員の皆さんの温かいご支援、ご協力の賜ものと思っております。本当に有難うございました。

私はこの一六年、知事の補佐役を務めてきたわけですが、いくつかの共通の思いを県政にこめてきたと思います。例えば、神奈川県政を理念と哲学のある県政にしたい、発信能力の高い個性的な県政にしたい、県内だけでなく、全国に、そして世界に通用する自治体になりたい、といったことでもあります。神奈川県政は、この16年間、長洲知事のリーダーシップと職員の皆さんのご尽力によりまして、この方向に向かって大きく前進してきたのではないかと思います。どうか皆さんのお力で、この流れをさらに大きく発展させて頂きたいと、心から願い願う次第であります。一六年間、私なりに精一杯仕事をさせて頂きましたので、とくに思い残すことはありません。このたびの人事異動で女性部長が初めて誕生しましたことは、退任にあたり最も嬉しいことの一つであります。

私は、コワイ顔をしておりますが、私も人の子でありますから、今日限り県庁を去ることについて、一方で大きな解放感を感じると共に、一抹のさびしさを感じていることも事実であります。しかし、私は今日限りあの世に旅立つわけではありませんし、仕事の面でも知事からのお話で、ひき続き県政と深いかかおりのあるところで働くことになりましたので、今日のお別れは〈ひとまずのお別れ〉ということにさせて頂きたいと存じます。職場は離れますが、これからも友情ある交流を続けさせて頃ければと思つて

おります。

知事はじめ、皆さんが益々お元気で、立派なお仕事をされますよう、心からお祈りしつつ、お別れの言葉といたします。皆さん長い間本当にお世話になりました。有難うございました。

私は六〇歳になるのがとても嫌だったので、努めて意識せずに過ごそうとしていたが、世間さまは結構お節介なもので、手を加え品をかえて還暦を自覚させようと仕向けてくるのだった。むろんお祝いのだがいはすべて固辞したが、あるとき、私のかつてのスタッフや若い同僚たちが開いてくれた会は、謀られているとは知りながらも、楽しいものであった。そしてこれを機に、還暦をうしろめたがつっていたこだわりが少しづつ薄れていくように思えた。

私は一九二九（昭和四）年、世界大恐慌の年に関東平野の真只中、茨城県は筑波山の西方、鬼怒川と小貝川に挟まれた、肥沃だが貧しい農村地帯に生まれた。戦前、戦中までのこの辺りの農民の暮らしぶりは、郷土の大先輩である長塚節の小説『土』に活写されている通りである。漱石が「斯様な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んでいるといふ悲惨な事実」「余の娘が年頃になって音楽会がどうだの、帝国座がどうだのと言いつ暮る時分になったら、余は是非此『土』を読ませたいと思っている……其時、娘に向かって面白から読めといふのではない、苦しいから読めといふのだと告げたいと思つて居る」と述べたような暮らしが、つい半世紀前まで続いていたのだ。私は早熟だったのか、軍国主義少年にこり固まつていく一方で、文学にも親しんだ。『土』の風景描写のところなど、そらんじるまでに読んだ。節の歌集にも親しんだ。今でも「白埴の瓶こそよけれ霧ながら 朝はつめたき水くみにけり」とか「鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠くきこえて秋たけにけり」など、いくつかの歌がすぐ口をついて出る。また、筑波根詩人と呼ばれた地方詩人横瀬夜雨の生家も隣村にあった。こうした郷土の文学的風土もあって、私は少年時代、帝国軍人になる夢を持つ一方、詩人になりたいという夢も持っていた。

それはいずれも儚ない夢に終わったが、戦後にも夢の残り火のようなものがあって、青年時代、その時々 の出来事や想いを歌や詩のようなものにして、日記風にメモ帳に書きつけておくクセがあった。その多くはすで行方知れずだが、還暦の感慨から古いノート類の整理を始めたところ、比較的まとまって保存されている数冊のノートが出てきた。

それらはいずれも、文学作品というより歌日記であり、詩的スケッチにすぎないものなので、いまこれを自分以外の人の目にさらすのは、自分の内臓をさらけ出すようで、とてもつらい想いもするが、「人類の青春」をめざして精一杯生きた私自身の青春の日々の赤裸な姿を、私の家族をはじめ、共に生きてきた親しい人びとに知ってもらうのも、私という人間を理解して戴くのに有意義ではないかと考え、あえて少数に限って活字にすることにした。関係者が次々にこの世を去り始めたことや、このたび公職を離れたこと、さらに友人内田正博君の勧めなどが大きな契機となった。

マルクスは階級社会がなくなり、国家がなくなる世を予見し、これを「人類の青春」と呼んだ。私はかつてそれを信じ、そのために自分の青春を捧げた。それは壮大な徒勞

に終わった感もするが、しかしそのことを私は少しも悔いていない。いや、むしろ戦後のあの時期に、貧しさとの闘いや人間解放のための運動に心動かされることのなかった人びとを、私は余り信じる気になれない。戦後の疾風怒濤の時代、己れの保身や栄達の心をかたぐり捨てて、真剣に左翼に身を投じ、それ故にスターリン批判で深く挫折し、チェコ事件で決定的にコミニズムと決別した人びと——私はそれより早く一九五八年に決別していたが——に深く共鳴する。従って私には、今日のソ連、東欧革命の必然性が痛いほどわかる気がする。

いま、マルクスの予見とは異なった道を通って、階級と国家がその相貌を変えつつある。核戦争の脅威や地球環境問題を契機に、人類の利害が当然のごとく階級的利害に優先する時代になったし、かつての革命勢力としての先進国プロレタリアートも、自らの長い苦難に満ちた運動の成果として、体制内に存在位置を確保し、プロレタリアートは存在しなくなった。欧州を先頭に、国家がまず経済的に、次いで政治的に国境のカベをなくす歴史的作業に取り組み始めている。国家もまた溶解・再編の過程に入ったかにもえる。

共産党専制に帰結したコミニズムは滅んだが、ヒューマニズムに根ざしたソーシャリズムの理念と政策は、さまざまな形で資本主義の血となり肉となつて資本主義を修正し、混合体制としての現代資本主義を創ってきた。いまや有限な地球環境と衝突し始めた巨大な生産力と消費文明、麻薬、犯罪、エイズ、失業、貧富の格差、南北問題などの病弊に苦しむ現代資本主義を、地球市民の立場から改革し、制御していくためにも、ソーシャルな理念と政策がグローバルに必要不可欠の時代になつていくように思えてならない。

だが、こうした問題に本格的な解答を創るのは、もはや私たちの世代の仕事ではなくなつた気がする。しみじみと、いま私は思う。若さ日に夢みた人類の青春も私の青春も、ともにはるかなる彼方に去ってしまったことを。

しかし、同時にまた思う。人は夢なしには生きられないことも。私はいま感じる。私の内部に新しい夢が芽生えつつあることも。

最後に、多くのストレスに耐え、私の波乱多き人生につき合ってくれた妻と二人の娘に心から「ありがとう」と言いたい。

一九九一年六月

人生ひとくぎり

久保美子

父が旧満州国官吏でしたので、私は奉天（瀋陽）で生まれました。敗戦の少し前、小学一年のとき、父を残し母と兄弟で両親の郷里茨城県に引き揚げてまいりました。戦後、父はシベリアに抑留され、一時は処刑されたとの報も入り、悲嘆のどん底に落ちましたが、うまく収容所を脱け出すことができたらしく、何度も死線をこえて無事帰国してくれました。

引き揚げ後の生活は文字通り茨の道で、辛酸の日々が続きました。小学時代、始めは村の分教場へ、後に本校へ通いましたが、本校までは片道四キロもある野良道でした。その頃、長兄の旧制中学の親友だった久保が私の家をしばしば訪れ、慣れぬ農業を始めた両親を、兄たちと一緒に手伝ってくれたりしておりました。それは、私たちにとっても心強いことでした。田植えや稲刈りなども一緒にやっておりました。筑波山が大きくそびえてみえる田圃の畦道にお茶や握り飯を私が運び、皆と一緒に食べたことも遠い思い出です。

やがて久保も兄二人も東京の大学へ。私も水戸の大学に進学したりして、互いに音信が途絶えておりましたが、長兄が不幸にも在学中事故で急逝したあと、久し振りに帰郷した久保が墓参に来てくれ、わが家との交流が復活いたしました。母はまるで自分の息子が帰ってきたように喜んでおりました。このとき、私はすでに、かつて久保が学んだことのある地元の小学校で教員しておりました。

父は職業柄、またシベリア抑留の体験から、すっかり革新嫌いになっておりましたが、久保のことはそんなこととは関係なく信頼していたようです。特に母は早くから私の伴侶として久保を心に描いていたようでした。結婚以前に久保は無党派になっておりましたが、私も余り思想・信条にこだわる気持ちはなく、兄たちとの交友ぶりから信頼できる人物との印象を持つておりました。その後長く一緒に暮らすようになりましたが、この印象は当たっていたように思います。田舎育ちの土臭さ、世渡り下手、昭和一ケタ特有の遊び下手は変わりませんでした。農民のような忍耐力と実直さは、三十年この方一貫していたように思います。

今にして思えば、その他のことは何も問わず、ただ人間性だけを頼りに私を久保に喜んで託してくれた両親に私は心から感謝したいと思っています。

もちろん、人間的ということは、いろいろな弱さを併せ持っているということ、久保もまた例外ではありません。情に流されて苦しむことも多々ありました。特に子育ての面では——私も同じですが——甘さが目立っておりました。その子供たちも早くも私が結婚したときの年齢をこえ始めました。半生をふり返ってみて、私にとりましても「はるかなる青春」の想いで一杯です。

この詩歌集が久保にとって人生ひとくぎりとなり、気持ちを一新して後半生を元気に生き抜く契機になって欲しいと願っています。

〈著者略歴〉

- 生まれる
- ・ 1929 (昭和4) 年6月、茨城県真壁郡下妻町(今は下妻市)に生まれる
- 学 ぶ
- ・ 茨城県立下妻中学(現下妻一高)、東京外国語大学中国語学科に学ぶ
- 働 く
- ・ 社団法人中国研究所にて現代中国研究に従事(研究員)
- ・ 労働調査協議会にて労働問題の調査・研究に従事(事務局長などを経て常任理事兼調査研究部長)
- ・ 1975 (昭和50) 年、長洲知事に請われて神奈川県庁に入り、地方自治に従事(知事室参事、県参事、県理事、副知事を勤め、1991 (平成3) 年6月退任)
- 住 む
- ・ 茨城県(下妻町、取手町) 東京都(中野区、三鷹市、) 神奈川県(川崎市麻生区、横浜市港北区)
- 家 族
- ・ 妻と娘2人

〈奥付〉

はるかなる青春——久保孝雄詩歌集

1991年8月1日

著者 久保孝雄

装幀 遠藤春雄

発行所 有限会社アップ工房

〒170 東京都豊島区東池袋 4-27-5

ライオンズプラザ池袋 510

電話 (03) 3988-6139

印刷所 みづほ企業株式会社

く石川真澄の目／＼浮かばれぬ死霊の群れをモスクワは想像できるか

アサヒグラフ 91.9.13号

一冊の本を著者から贈っていただいた。『はるかなる青春』。Kさんの詩歌集(非売品)である。

Kさんはある県の幹部を十六年つとめ、副知事を最後にこの夏六十二歳で退職した。あたたかい誠実な人柄で多くの人に敬愛されているが、政治よりは学究の人と思わせる勉強家でもある。

本は、退職記念に親しい人々に配ったいわば私信のようなもので、だから私も実名を書くのをはばかっているのだが、それでもあえてここで紹介したいと思ったのは、私情からばかりではない。

献辞に「一九九一・八・二五 ソ連共産党解散の報を聞きつつ」とある。そこには、たまたまの上梓の時を記す以上の著者の思いがある。

駅頭にアカハタ売れば初客は赤子背負いし朝鮮人なりき

ひたすらに線路の道を歩みたり路銀乏しきオルグのわれら

Kさんはいわゆる革新陣営の人である。県庁に入ったのも、革新知事の補佐役としてだった。「あとがき」でKさんはいう。

「マルクスは階級社会がなくなり、国家がなくなる世を予見し、これを『人類の青春』と呼んだ。私はかつてそれを信じ、そのために自分の青春を捧げた」

Kさんは一九五八年に日本共産党を離れているが、この本に収められた詩歌の中心はそれ以前のものだ。その時期のうたを今、この時出す。「あとがき」は続けていう。「それは壮大な徒労に終わった感もするが、しかしそのことを私は少しも悔いていない。いや、むしろ戦後のあの時期に、貧しさとの闘いや人間開放のための運動に心動かされることのなかった人びとを、私は余り信じる気になれない」

しかし、一方で「モスクワに告ぐ」という五七年につくった次のような詩がある。

おれは敬礼する

モスクワの赤い星よ

拒否してきた

数々の慰めの季節の彼方に

お前はいつも傲然と輝いていた

(中略)

だがモスクワよ

お前は知っているか

お前のひと呼吸のタイミングが

少しずれただけでも

お前の一挙手の方角が
少しゆがんだだけでも
全世界の左翼が大量に生き
そして 大量に傷つき死ぬことを
モスクワの赤い星よ

お前の赤は
人の心を凍らせる赤であってはならぬ

お前の赤は
見る人の心を温め励ます

太陽の赤でなければならぬ

幾十幾百万もの青春が、これと同じ黒雲のような疑いと一縷の希望とを抱いて滅んでいった。Kさんの詩歌集には昂然たるセンチメンタリズムがあつて救われるが、ついに浮かばれない死霊の群れをモスクワは想像することができるだろうか。(朝日新聞編集委員)

書評2

『久保孝雄詩歌集』を読んで

鈴木正実

久保先生、詩歌集「はるかなる青春」、アサヒグラフに掲載された「石川真澄の目」、24日朝受け取りました。大変有難うございました。1日かけて読ませていただきました。

まことに見事な人生です。副知事になったのは付録で、真髓は前半生、特に少年時代から50年代の魂の叫びにあります。

特に私が感動した作品は、「幼き日みた夢一ついまも忘れず 土堤にしゃがみて泣ける亡き母」「冬近き晩秋の夕べは母想う 病冒して働き死にし我が母」、特に「ただ一度母にわがまま言いしことあり 小学二年農協購買部にて」には幼いながら、すべてを理解している賢い子供の心情が、そして後になって烈しく後悔しながらも、それでもなお母の無限の愛情をその幼き全身に受けて誇らしくしている作者の喜びがいっぱい広がっていて、私には、あの技巧に懲りすぎた茂吉の絶唱よりもはるかに心に沁みました。

今もそうですが写真を見ても若い頃から久保さんは、ゴリラのような私などとは違ってなかなかダンディですし、洋服が大変似合っています。この衣服に対する関心は、108の「ある会話」の3人の姉弟の会話の中にもありますから、そのあたりが古代から新天皇平将門を輩出したほどに豊かであった筑波山麓の文化的な伝統なのか。

炭鉱にオルグにいった折の、「ひたすらに線路の道を歩みたり 路銀乏しきオルグのわれら」「路銀絶え線路歩きて夜明くれば 極楽のごと見ゆ菜の花畑」の直後に、「美わしき蓮のうてなに糸紡ぐ 母を夢見て旅寝覚めゆく」が出てきてドキッとしました。僭越ながら推量するに、このオルグの日々が、「中国の赤い星」とマルクスの「人類の青春」に殉じた久保さんの人生の絶頂の日々であったのでしょうか。この連作は光り輝いています。また、お父さんが亡くなるときの絶唱にも「死に近き声なき父の手をとれば 極楽浄土よあらまほしけれ」があつて、苦勞し続けた父母が、せめてあの世では幸せになつて欲しいという、悲しいまでの叫びが聞こえてきて、胸つぶれる思いがしました。私なども北海道の開拓の寒村（北見市若松）の二人兄弟の末に生まれて、小さい頃から野良仕事に追いまくられ、貧困の中で死んだ父母のことを想うと、今でも胸ふたぐる思いがするのです。

「ドル無きやとわれに問いたるかの少年 利発なる目にななしみの影あり」も秀逸で、この少年は筆者そのものといつてもよいでしょう。追い詰められたこの少年の悲しみは、そのときのロシアそのものの悲しみなのでしょう。それを一瞬に捉えた作者の目の悲し

みが私にも伝わってきました。そしてもう50歳を超えたこの少年は今どうしていることでしょうか。もうとうに死んでいるかもしれませんし、どこかで富豪になっているかもしれません。そして今、プーチン専制のもとで、心優しいロシアの民衆はどうしているのでしょうか。

さいごに、ある意味では「自分の思い」だけで「勝手気ままに」生きてきた久保さんが、「クリスマス・イヴ」に泣いていた奥さんや2人の娘によって、初めて自分の立場と自分の適性を見つめ、夜更けに独り「いなり鮪」をつまむ決意の姿が、まことに人間らしく思われました。この場面は、「杜子春」の最後で、杜子春が鞭打たれる父母の姿をした馬に「お母さん！」と叫ぶクライマックスを思わせるもので、あのシーンが浮かんできました。人生の転機とは真にこのようなものなのでしょう。私も子供が生まれた後全くそうでした。

立候補のときに貯金通帳を差し出し、懸命に選挙運動をしてくれた奥さんに、「ただ人間性だけを頼りに私を久保に喜んで託してくれた両親に私は心から感謝したいと思います」と言われては、人生もう思い残すことはないでしょう。いくら強がっても、所詮男など、お釈迦様の掌のうえで飛び回る孫悟空以上のものではないのかもしれませんが。

私は1966年、18歳の時に北海道から水戸の茨大の文理学部に入學して、数年間水哉寮で暮らしていました。きつと奥さんは私の大先輩になるのだと思います。水哉寮に入ったとき、同室に下妻一高から来た大里君という人がいて、その後茨城で小学校の校長になっているようです。懐かしいです。

(中略)

茨城の思い出といえば、人間の質がいいというのが一番です。実直で行動力があり義に生きるすがすがしさがありません。いつもはにかみがちで自分を誇ることが無いのは最大の美点でしょうがしかし最大の欠点でもあります。平将門といい、水戸学や天狗党といい、権謀術数に生きる長州等とは違って、時代に先駆けますがいつも貧乏くじを引く伝統があるようです。私など祖先が会津でその後水戸ですから、まるで貧乏くじの王道を歩いているようなもので困ったものです。

つまらないことを書きましたが、でも久しぶりに大変すがすがしい本を読ませていただきました。有難うございました。最近私が書いた雑文もいくつかお送りしますので、御笑読ください。では、失礼します。奥様にもよろしくお伝えください。